

ジョン・ポリドリの『ヴァンパイア』

—— 出版の背景と英語圏における吸血鬼小説への影響 ——

細 川 美 苗

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第1 - 1号 (抜刷)
2018年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 1-1 September 2018

ジョン・ポリドリの『ヴァンパイア』

—— 出版の背景と英語圏における吸血鬼小説への影響 ——

細 川 美 苗

はじめに

1819年4月1日、『ニュー・マンスリー・マガジン』(*New Monthly Magazine*) は「ヴァンパイア-バイロン卿による物語」(‘The Vampyre: A Tale by Lord Byron’) を掲載し、大きな物議を引き起こした。ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 6th Baron Byron, 1788-1824) の名を騙った物語は大きな関心を呼び、雑誌に掲載された後に出版され、1819年だけでも第7刷まで売り上げ (Morrison x), 1820年代および30年代を通じて怪奇譚の出版を牽引する物語となった (Bishop xii)。今日においてもなお、ヴァンパイア関連の物語はホラー・ストーリーの中核を占めているといえる。

ポール・バーバー (Paul Barber) によれば、ヴァンパイアに類似した言い伝えは世界中に存在している。

If the origin of Storker’s character is confusing, folklore is scarcely less so, for there we find many kinds of “vampires.” We might limit the discussion to a particular type of Slavic revenant — the one actually called *vampir*, or *upir*, or some other etymological equivalent of the word. But there are similar creatures in Europe that are referred to within their cultures by different names entirely. With a persistent sense of the fitting (and a deplorable sense of taxonomy), European scholars have commonly referred to these, and to the

undead in far-off cultures — for example, China, Indonesia, the Philippines — as “vampires” as well. There are such creatures everywhere in the world, it seems, in variety of disparate cultures: dead people who, having died before their time, not only refuse to remain dead but return to bring death to their friends and neighbors. As we shall see, they bear a surprising resemblance to the European vampire, for reasons that should become clear. (2)

もし [ブラム・] ストーカーの作り出した人物の起源が分からないとしても、民間伝承におけるヴァンパイアの起源が少しでもより明白であるということはない。民間伝承においても多くのヴァンパイアが存在するのだ。ヨーロッパ東部のスラヴ民族に伝わる特定の種の幽霊に議論を絞ると良いかもしれない—実際ヴァンピールまたはウピール、もしくはそれと語源的に同一の言葉で呼ばれている存在に。それでも、それぞれの文化によって全く異なる名前と呼ばれている類似したものがヨーロッパ中に存在している。根気強い調整力(と分類に関する嘆かわしい感覚)を持って、ヨーロッパの学者たちはそれらに加えて、遙か彼方の文化—例えば中国やインドネシア、フィリピン—に属するものもまた「ヴァンパイア」と名付けた。類似したものは世界中、様々な異なる文化の中に存在しているようである。死期が早すぎた者が死に留まるのを拒むのみならず、友人や近隣に住む者に死をもたらすために舞い戻ってくるのである。後に見るように、それらは驚くほどヨーロッパのヴァンパイアに類似しており、それは次第に明らかになる理由によるものだ。

バーバーはその著書において、死が肉体にもたらす物質的な変化や感染性の病の流行と吸血鬼伝説の形成の関係を詳しく議論している。吸血鬼に関する世界的視野に立ったバーバーの研究の中で、本論で特に注目しておきたいのは、今日一般的に表象される吸血鬼と民間伝承のそれは全く異なっていると指摘して

いる点である。バーバーは以下のように述べている。

Before proceeding, however, we must rid ourselves of a burden of false data from the fiction industry. If a typical vampire of folklore, not fiction, were to come to your house this Halloween, you might open the door to encounter a plump Slavic fellow with long fingernails and stubby beard, his mouth and left eye open, his face ruddy and swollen. He wears informal attire — in fact, a linen shroud — and he looks for all the world like a disheveled peasant.

If you did not recognize him, it is because you expected — as would most people today — a tall, elegant gentleman in a black cloak. But that would be the vampire of fiction, a figure *derived* from the vampires of folklore but now bearing precious little resemblance to them. His classic exemplar is Count *Dracula*, who in this century has had unparalleled success in the movies. The count, the villain of Bram Stoker's novel *Dracula*, was not Slavic: he lived in Transylvania and was based, more or less, on Vlad Tepes, a figure in Romanian history who was a prince, not a count, ruled in Walachia, not Transylvania, and was never viewed by the local populace as a vampire. (2)

話を進める前に、出版業界からの間違った情報という重荷を下ろさなければならぬ。小説に描かれるのではなく、民間伝承に登場する典型的な吸血鬼が今度ハロウィンにあなたのお宅にやってくるとしましょう。ドアを開けたあなたは長い爪とごわごわしたひげを生やした太ったスラヴ系の奴と出くわすでしょう。その口と左目は開かれ、顔は赤みがかって腫れているはずだ。その者は平服を身に付け—それは実際はリネンの経帷子なのだが—だらしのない農民とまったく見分けがつかないのです。

もしあなたがその者が誰だかわからないならば、それはあなたが—今日世界中のほとんどの人がそうであるように—黒いマントを纏った背の高い

優雅な紳士であろうと予期していたからなのです。しかしそれは、小説に登場する吸血鬼です。民間伝承をもとに形成された人物像ではあるが、いまや民間伝承の吸血鬼とは希少なほとんど皆無といって良いほどの類似しか持ち合わせていないのです。彼の不朽の原型はドラキュラ伯爵であり、今世紀に入って映画界で類を見ない成功を収めている。その伯爵は、ブラム・ストーカーの小説『ドラキュラ』に登場する悪漢で、スラヴ系の人物ではない。彼はトランシルヴァニアに住んでおり、だいたいヴラド・テペスを手本としている。彼はルーマニア史に登場する侯爵であり伯爵ではなく、トランシルヴァニアではなくワラキアを治めた人物である。また、民衆から吸血鬼とみなされたことは一度もない。

つまり、民間伝承に見られる吸血鬼伝説は小説に登場する吸血鬼像の発生に寄与したものの、その後小説の中の吸血鬼像は民間伝承の中の存在とは完全に別種のものとして発展したといえる。上記引用中でバーバーは今日一般的になっている吸血鬼像の原型をブラム・ストーカー (Bram Stoker 1847-1912) の小説の中に見出しているが、ストーカーが何を頼りにその人物像を作り上げたかは確認できないでいる。その一方で、ストーカーの描く吸血鬼の姿は、民間伝承における吸血鬼像とは著しく異なっている点は明確に指摘している。

バーバーの疑問に答えるように、ビショップは現在流布している吸血鬼像の形成、つまりストーカーが完成させた吸血鬼像の形成に、ジョン・ウィリアム・ポリドリ (John William Polidori, M. D. 1795-1821) の小説が大きく影響しているのではないかと以下のように指摘している。“Polidori’s historic transformation of the hideous, village vampiric ghoul of the Orient and Eastern Europe mythology into an aristocratic, travelling seducer in *The Vampyre* began a unique genre of vampire literature.” (xviii-xix) (「アジアや東ヨーロッパの伝承に現れる醜い田舎の吸血食屍鬼が、ポリドリの『ヴァンパイア』において高貴な巡歴する誘惑者へと歴史に残る変貌を遂げたことは、吸血鬼文学という独自のジャンルを誕

生させた。』) さらに、ビショップはポリドリの生んだ新しい吸血鬼の姿が、ストーカーを経て現代にいたる様子を以下のように跡付けている。

J. M. Rymer's *Varney the Vampire* (1847) reincarnated the aristocratic vampire as Sir Francis Varney whilst J. Sheridan Le Fanu's *Camilla* (1872) features a female aristocrat — the Countess Mircalla Karnstein ; Bram Stoker's *Doracula* (1897) brings his vampiric Count from Eastern Europe to England. Anne Rice with her best selling novel *Interview with the Vampire* (1976) and sequels thrilled yet another new generation of readers. The fictional vampire is constantly being re-energized for new audiences. Polidori is responsible for creating a literary vampire figure that has become part of the popular imagination. (xix)

J. M. ライマーの『吸血鬼ヴァーニー』は貴族階級の吸血鬼をサー・フランシス・ヴァーニーとして蘇らせた一方、J. シェリダン・レ・ファニユの『カミーラ』は女性貴族—カルンスタイン伯爵夫人マーカラーを描いた。ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』は吸血鬼である伯爵を東ヨーロッパからイギリスへと連れてきた。アン・ライスはそのベスト・セラーである『インタヴュー・ウィズ・ザ・ヴァンパイア』（『夜明けのヴァンパイア』）とその続編において、さらに新しい読者を震撼させた。ポリド리는今や世界中に広まっている空想の産物となった文学的吸血鬼像を作り上げた源なのである。

つまり、19世紀以前に広まっていた吸血鬼に関する口頭伝承とは全く異なる文学上の想像物としての吸血鬼の誕生は、ポリドリの『ヴァンパイア』に端を発するといえるだろう。

また、ロバート・モリソン (Robert Morrison) もロマン主義時代においてロ

バート・サウジー (Robert Southey 1774-1843) やバイロン, サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge 1772-1834) も口頭伝承に合理主義を超えた精神性もしくは心理的な深みを見出そうとするなかで, 同様に吸血鬼モチーフを用いた作品を残したことを紹介しつつ, 現代見られるような形で吸血鬼小説の伝統の端を開いたのはポリドリであるとしている (x-xi)。都市に住む教育を受けた中産階級もしくは貴族である吸血鬼はポリドリ以前には見受けられず, 彼は吸血鬼を農村から社交界や名高い観光地へと連れ出すことによって高貴な吸血鬼に纏わる魅惑的な歴史の礎を形成したのである。

ジョン・ウィリアム・ポリドリ

イタリア人であったガエターノ・ポリドリ (Gaetano Polidori) は1790年にパリからロンドンに移り住み, ジョン・ミルトン (John Milton 1608-1674) の『失樂園』 (*Paradise Lost* 1667, 1674) やホレス・ウォルポール (Horace Walpole 1717-1797) の『オトランド城』 (*The Castle of Otranto* 1764) をイタリア語へ翻訳した人物である。ガエターノは1793年にイギリス人のアナ・マリア・ピアス (Anna Maria Pierce) と結婚し, ポリドリは長男として生まれた。

ポリドリはエディンバラ大学で学び19歳で医者となり, 1816年4月に20歳でバイロンの主治医として彼に追従してヨーロッパへ旅立った。すでに『貴公子ハロルドの巡礼』 (*Childe Harold's Pilgrimage* 1812) によって有名詩人であったバイロンは, その放埒な生活が災いしてイギリスの社交界から去るのである。この旅行に際して, ジョン・マレー (John Murray) は後に出版する目的でポリドリに500ポンド支払い, 日記をつけるように依頼した。この日記は後にポリドリの甥にあたるウィリアム・マイケル・ロセッティー (William Michael Rossetti 1829-1919) が編集し出版した。(ポリドリの妹フランシス (Frances) は1826年にガブリエーレ・ロセッティ (Gabriele Pasquale Guiseppe Rossetti) と結婚し, ウィリアムの他にもガブリエル (Gabriel Charles Dante

Rossetti 1828-1882) やクリスティーナ (Christina Rossetti 1830-1894) らをもうけた。ガブリエルとクリスティーナは19世紀中盤以降盛んになったラファエル前派運動の中心人物である。ガブリエルはイタリアの詩人ダンテ (Dante Alighieri 1265-1321) に敬意を表し創作活動においてはダンテ・ガブリエルという名を使用し、一般的にそのように知られている。

ポリドリはバイロンと連れ立ってジュネーブに向かい、レマン湖のほとりでバイロンが借りたデオダティ荘 (Villa Diodati) でパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822), メアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィン (後にメアリ・シェリー Mary Wollstonecraft Godwin Shelley 1797-1851), クレア・クレアモント (メアリの父の後妻の連れ子 Clara Mary Jane Clairmont 1798-1879 子供のころは Jane と呼ばれていたが、後に Clara そして Claire と自ら名を改め、一般的に Claire Clairmont として知られている) らと交流した。6月のある晩、バイロンが各自怪奇譚を創作しようと提案した。その時にメアリ・シェリーが『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein* 1818, 1831) の着想を得たことは有名である。その時の詳細が、『フランケンシュタイン』第3版の序に書かれているので、以下に紹介したい。

“We will each write a ghost story,” said Lord Byron; and his proposition was acceded to. There were four of us. The noble author began a tale, a fragment of which he printed at the end of his poem of Mazeppa. Shelley, more apt to embody ideas and sentiment in the radiance of brilliant imagery, and in the music of the most melodious verse that adorns our language, than to invent the machinery of a story, commenced one founded on the experiences of his early life. Poor Polidori had some terrible idea about a skull-headed lady, who was so punished for peeping through a key-hole — what to see I forget — something very shocking and wrong of course; but when she was reduced to a worse condition than the renowned Tom of Coventry, he did not know what to

do with her, and was obliged to dispatch her to the tomb of the Capulets, the only place for which she was fitted. The illustrious poets also, annoyed by the platitude of prose, speedily relinquished their uncongenial task. (22-23)

「それぞれ怪奇譚を一つ書こうじゃないか」とバイロン卿は提案し、それは一同に受け入れられました。我々は四人でした。著名な詩人は物語に着手しました。それは、彼の詩「マゼッパ」の後ろに収録された断片です。シェリーは若き日の体験をもとに何か書き始めた。かれは華々しい想像力の産物による輝きの中、つまり我々の言語の美しさをより引き立てるきわめて旋律的な響きにおいて感情や考えを具象化することの方が物語の流れを考えるよりも得意でした。ポリドリは哀れにも骸骨頭の淑女にまつわる酷い思い付きをしました。彼女は鍵穴から覗いたことで罰せられたのです。何を見るためだったかは忘れてしまいましたが、もちろん何かひどく驚くべきことで間違ったことです。しかし、彼女がかの覗き見トムよりもひどい状態になった時には、ポリドリは彼女をどうしたものか分からずに、唯一彼女にお似合いの場所だと思われたキャピュレット家の墓所へと送ったのでした。華々しい詩人たちもまた散文の長さ嫌がさして、早々に性に合わない仕事をやめてしまいました。

この序文は1831年にメアリ・シェリーが『フランケンシュタイン』第3版に寄せた序文の一部である。この晩バイロンが書いた「断片」やバイロンの初期の詩『ジャウア（異教徒）』（*The Giaour* 1813）をもとに、ポリドリは『ヴァンパイア』を執筆したようである。メアリ・シェリーはポリドリが骸骨頭の女性に関する怪奇譚を書いたとしているが、ポリドリは自分がこのときに書いたのは『アーネスタス・ベルヒトルト』（*Ernestus Berchtold; or, The Modern Oedipus* 1819）だと、以下のようにその小説の序文で述べている。

The tale here presented to the public is the one I began at Coligny, when Frankenstein was planned, and when a noble author having determined to descend from his lofty range, gave up a few hours to a tale of terror, and wrote the fragment published at the end of Mazzepa. Though I cannot boast of the horrible imagination of one, or the one, or the elegant classical style of the latter, still I hope the reader will not throw mine away, because it is not equal to these. (49-50)

ここに示します物語は私がコリニーで書き始めたもので、それはフランケンシュタインの構想が練られた時であり、ある高貴な作家がしばらくの間怪奇譚のためにその高雅な領域から降臨されて、マゼッパの末尾に付して出版された断片を書かれた時であります。フランケンシュタインのような身の毛もよだつ想像力や後者の作家の持つ優雅な古典様式をお見せすることはできませんが、それでも読者の皆さんがその両者に及ばないという理由で私の作品を投げ出してしまわないようにと願っております。

ここでポリド리는、メアリ・シェリーが『フランケンシュタイン』の着想を得た晩に『アーネスタス・ベルヒルト』を書いたと主張しているが、その内容はメアリ・シェリーが『フランケンシュタイン』第3版の序文で紹介しているものとは内容が著しく異なっている。その点は、ポーラ・R・フェルドマン (Paula R. Feldman) らが指摘しているとおりである (118)。1816年当時のメアリ・シェリーとポリドリの関係は良好であったが、上記序文が出版された1831年にポリド리는すでに亡くなっており、ポリドリの物語にまつわるメアリ・シェリーの酷評の真意は分からない。

ポリドリの日記によると、1816年6月16日にシェリーとシェリー夫人、クレア・クレアモントがやって来てその晩は宿泊したことが記されている。翌日17日には“The ghost-stories are begun by all but me” (205) (「私以外の全員

が怪奇譚を執筆し始めた)とポリドリは書き込んでいることから、フェルドマンらは上記のバイロンによる怪奇譚創作の提案は16日であったのではないかと推測している(118)。残念ながら、ちょうどこの時期のメアリ・シェリーによるジャーナルの記録はないが、彼女は、少し時間を経た7月24日には、“I ... write my story”(「自分の物語を書いた」)と記述している。フェルドマンらはこれをジャーナルにおける最初の『フランケンシュタイン』への言及であると指摘している(118)。メアリ・シェリーはしばらくの間物語をまとめることができずに悔しい思いをしたと『フランケンシュタイン』第3版の序文に書いている。“*Have you thought of a story? I was asked each morning, and each morning I was forced to reply with a mortifying negative.*”(23 強調原文)(「お話は思いついたかい?と、毎朝尋ねられるが、そのたびに辛い思いで期待に反する答えをしなければならなかった。)」つまり、しばらくは物語の構想を固めることができなかつたメアリ・シェリーであったが、7月24日には『フランケンシュタイン』を書いているとジャーナルに記しているのであるから、6月16日頃に怪奇譚創作が始まったというフェルドマンらの指摘はきわめて妥当だといえる³⁾。

1816年8月29日にシェリー一行はバイロンとポリドリと別れ、イギリスへの帰路に就いた。シェリーはバイロンによる『貴公子ハロルドの巡礼』第3編および『シヨン城の囚われ人』(*The Prisoner of Chillon* 1816)の原稿をロンドンの出版社へ届ける手はずになっていた。その後9月6日のポリドリの日記に、そりが合わないという理由でバイロンに解雇されたと記されている。“LB determined our parting, — not upon any quarrel, but on account of our not suiting. Gave me £70; 50 for 3 months and 20 for voyage. Paid away a great deal, and then thought of setting off: determined for Italy.”(「LB(バイロン)は我々の離別を決めた。いかなる不和によるのでもなく、合わないというだけだ。私に70ポンド支払ってくれた。三か月分の給料として50ポンド、20ポンドは交通費。大部分を支払いに充て、それから旅立つことと考え、イタリアに行くこと

にした。』) このようなわけで、ポリド리는9月16日にバイロンに別れを告げ、イタリアへ旅立った。

ポリドリはその後ミラノとヴェニスでバイロンと再会するが、1817年にイギリスへ帰国し、ノリッジで貧しい人たちのための診療所を開いた。ノリッジでの文学サークルにも招かれ、同じく医師であったトマス・マーティノー(Thomas Martineau)の当時13歳であった幼い娘であり、後に社会学者となるハリエット・マーティノー(Harriet Martineau 1802-1876)とも親交を持った。しばらくは執筆をつづけていたが、事故により脳に損傷を負ってからのというもの、身体的にも精神的にも衰弱してしまった。1821年8月にロンドンで自ら処方した薬物の過剰摂取で亡くなった。賭博による負債が原因の青酸による自殺だったようだが(Romantic Circles)、その死因が“Death by the Visitation of God”(「神の到来」)とされたことは(Bishop x)、自殺は罪であったことからの配慮であろう。

出版の背景

『ヴァンパイア』を出版したヘンリ・コルバーン(Henry Colburn)は1818年の秋に無名の差出人から原稿を受け取り、それを「存命の詩人としては当時世界で最も有名」(Morrison vii)であったバイロンのものであると偽って出版した。同小包には、スイスにおけるバイロンの行動を詳細に記した手紙も梱包されており、バイロン本人もしくは彼に近い人物の手によるものであると推察することは妥当であったが、バイロン自身の原稿であると断言したのは、売り上げ低迷と新たにスコットランドで発刊されたブラックウッズ・マガジン(*Blackwood's Magazine*)の台頭に頭を抱えたコルバーンの起死回生の策であった(Morrison vii)。『ヴァンパイア』は商才に長けたコルバーンの目論見をも上回る売れ行きとなり、世間はバイロンの正確な自画像と思われる怪奇譚に震え上がった。ビショップはこの経緯について、ポリドリからコルバーンへ宛て

た1819年4月2日付けの手紙を紹介しつつ以下のように説明している。

Later, in a letter to Henry Colburn, Polidori explained the origin of the tale in Geneva in 1816: ‘the Vampyre which is not Byron’s but was written entirely by me at the request of a lady ... which I did in two idle mornings by her side’. It was with her that Polidori carelessly left his original manuscript and apparently forgot all about it until he saw the story published in the *New Monthly Review* two years later. (xvii)²⁾

後になって、ヘンリ・コルバーン宛の手紙でポリドリは、ジュネーブで1816年に書かれた物語が生まれた状況を以下のように説明している。「ヴァンパイアはバイロンの作品ではなく、ある貴婦人の要望に従ってすべて私が書いたものなのです。私はそれを何もすることのない午前中に二日間かけて書きました。」不注意にもポリドリはその原稿を彼女のもとに置き忘れ、どうも2年後に「ニュー・マンスリー・レビュー」の紙面にそれが掲載されているのを目にするまですっかり忘れていたようだ。

事実が明らかになったのちも、『ヴァンパイア』はバイロンに関係づけられるか、そうでなければ、筆者の名は空白となった(図1, 図2を参照)。

加えて、『ヴァンパイア』の筆者とされたバイロンの方でもその噂に反論している。以下はその点に関する『ジェントルマンズ・マガジン』(*Gentleman's Magazine*)からの引用である。

Lord Byron. — Two publications, supposed to be the productions of Lord Byron, have lately excited considerable attention in the Literary world. The one is entitled “The Vampire,” and the other “An Account of Lord Byron’s residence in the Island of Mityline [sic].” His Lordship has transmitted the

following letter on the subject to the Editor of *Galignani's Messenger*, an English daily paper published in Paris :

“Sir, in various numbers of your Journal, I have seen mentioned a work, entitled ‘The Vampire,’ with the addition of my name as that of the author. I am not the author, and never heard of the work in question until now. In a more recent paper, I perceive a formal annunciation of ‘The Vampire,’ with the addition of an account of my ‘Residence in the Island of Mitylene,’ an island which I have occasionally sailed by in the course of travelling, some years ago, through the Levant, and where I should have no objection to reside, but where I have never yet resided. Neither of these performances are mine, and I presume that it is neither unjust nor ungracious to require that you will favour me by contradicting the advertisement to which I allude. (The Gentleman’s Magazine. v. 89 pt. 1 1819 p. 633

<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015027525057;view=1up;seq=669>
(2018/02/19))

バイロン卿－バイロン卿の手によると思われた二つの作品が最近文学会で大きな関心を集めている。一つは『ヴァンパイア』であり、もう一方は『ミティリニ島におけるバイロン卿の居留の詳細』である。バイロン卿はパリで発行されている英字新聞のひとつである「ガリニャーニ・メッセンジャー」の編集長宛てに以下の書簡を送付された。

「編集長あなたの新聞の多くの刊において『ヴァンパイア』という作品に著者として私の名前が付されているのを目にしました。私は著者ではありませんし、今までその著作物について耳にしたこともありませんでした。より最近の紙面においては、『ヴァンパイア』に加えて、私の『ミティリニ島における居留の詳細』に関する正式な告知を見ました。その島は数年前に私がレバント地方を旅した際に付近を通過したことがあり、住んで

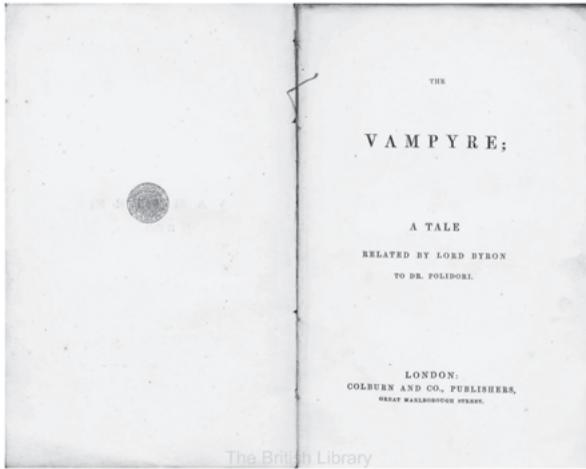


図1 *The Vampyre; A Tale*. Related by Lord Byron to Dr. Polidori. London: Colburn and Co., [c. 1819]. (大英図書館所蔵) 第2版

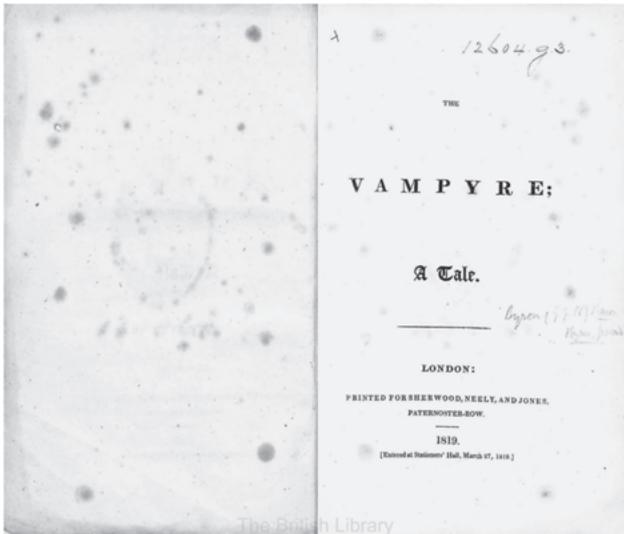


図2 *The Vampyre; A Tale*. London: Printed for Sherwood, Neely, and Jones, 1819. (大英図書館所蔵)

みることが嫌なわけではありませんが、いまだに居留したことはありません。上記二作品はどちらも私が執筆したものではありません。それ故、この二作品に関する広告をきっぱりと否定してくださるようお願いすることは、不当なことでも恩知らずなことでもないであろうと思うのです。

『ヴァンパイア』の主人公の名前であるルツヴェン卿 (Lord Ruthven) は、バイロンとの不倫によって身を滅ぼしたキャロライン・ラム (Caroline Lamb 1785-1828) が、彼を非難するために書いた『グレンナヴォン』 (*Glenarvon* 1816) という小説に登場するバイロンとみられる主人公の名前 (Clarence de Ruthven, Lord Glenarvon) に由来している。この点から、ポリドリが『ヴァンパイア』で若い娘の命を奪う悪漢を描くに当たりバイロンを念頭に置いていたことは間違いないだろう。一方、ポリドリの意図せぬ形で世に出た小説は、そのような内容を持つ故に、バイロンが著者であると偽り販売を促進しようという出版社の思惑通りに耳目を集めたことは、ポリドリにとってもバイロンにとっても不幸なことであった。自らを戯画化した過去の愛人の手による小説の主人公名をバイロンが自身の小説の主人公に与えるというのは、一般的には奇妙に思える。このような虚声が多く受け入れられたことは、バイロンにイギリスからの出国を余儀なくさせた彼の放蕩が作り出したイメージが非常に強烈であったことを示している。つまり、過去の愛人の小説が自らに与えた名前をわざわざ自分の小説の主人公に与えるほど、世間はバイロンを風変わりな人物とみていたか、そうでなければ、『ヴァンパイア』に描かれる悪漢を彼の手による自画像であるという風に考えるのを、読者は好んだのだといえる。

『ヴァンパイア』

マシュー・ベレスフォード (Matthew Beresford) がいわゆる「ルツヴェン方式」 (Ruthven formula) と呼ぶポリドリに由来するヴァンパイア像は、“suave

and aristocratic yet dangerous and alluring” (119) (「洗練された貴族でありながら、危険で魅力的」) な者である。犠牲者を女性に限るというのも、ポリドリに始まることであるとベレスフォードは指摘している(119)。興味深いことに、ポリドリの後にシェリダン・レ・ファニユ (Sheridan Le Fanu 1814-1873) によって描かれる女性吸血鬼においても、犠牲者は若い女性である。ここで暗く抗いがたい魅力を放つ上品な紳士像を、『ヴァンパイア』の中で確認しておきたい。以下は小説の冒頭の部分である。

It happened that in the midst of the dissipations attendant upon a London winter, there appeared at the various parties of the leaders of the *ton* a nobleman, more remarkable for his singularities, than his rank. He gazed upon the mirth around him, as if he could not participate therein. Apparently, the light laughter of the fair only attracted his attention, that he might by a look quell it, and throw fear into those breasts where thoughtlessness reigned. Those who felt this sensation of awe, could not explain whence it arose: some attributed it to the dead grey eye, which, fixing upon the object's face, did not seem to penetrate, and at one glance to pierce through to the inward workings of the heart; but fell upon the cheek with a leaden ray that weighed upon the skin it could not pass. . . . In spite of the deadly hue of his face, which never gained a warmer tint, either from the blush of modesty, or from the strong emotion of passion, though its form and outline were beautiful, many of the female hunters after notoriety attempted to win his attentions. (3)

ロンドンの冬には付き物の浮かれ騒ぎの中、流行の先端を行くものたちの多彩なパーティー会場に、地位よりはその風変わりな様子のせいで注目を集めるある紳士が現れた。まるで溶け込むことができないかのように、彼は自分を取り巻く喧騒をじっと見つめていた。若い女性の甲高い笑い声だ

けが、明らかに彼の目を引き、彼は一瞥でそれを鎮圧し、軽率な思いであふれた胸の中に恐怖という感情を投げ込むことができた。この畏れの感情を経験した者たちは、それが何に由来する感情なのか理解できなかった。ある者はそれを彼の生気のない灰色の瞳のせいにした。その眼は対象の外見のみに固定されており、内部に入り込み一瞥で心の隅々までを見通すようなものではないが、対象の頬の上に鉛色の視線を落とし、それが入り込むことのできない皮膚の上に重くのしかかっていた。…慎み深さや強い情熱といったものによって赤みを帯びたりすることが決してない彼の死人のような顔色にも拘らず、彼の外見は美しく、評判の人物を追い求める女性たちは彼の関心を引こうと躍起になった。

ここに太った農民の吸血鬼ではなく、高貴で愁いを帯び、死の影を纏いながらも抗いがたい魅力を強烈に発する現代的な吸血鬼像がはっきりと見て取れる。ポリドリの想像した新しい吸血鬼像は、小説内において人々を魅了するのみならず、世代を超えて多くの媒体を通じて人々を虜にし、現代においても繰り返し新しい物語の源となり再生産されている。時代が下るにつれロマンスの要素が取り入れられる傾向もみられるが、ポリドリにおいてはそのような人間的な感情とは切り離された存在である点は、現代的な吸血鬼とは異なるといえる。

註

- 1) ポリドリの日記は1616年6月15日に以下の記入がある。“Afterwards Shelley and I had a conversation about principles, — whether man was to be thought merely an instrument.” (Bishop 203)「その後私とシェリーは様々な原理について話し合った。—人間は単なる機械だと考えられるべきなのかどうかという点に関して。」この点に関しては、『フランケンシュタイン』第3版のメアリ・シェリーによる序文の中でも触れられている。“Many and long were the conversations between Lord Byron and Shelley, to which I was a devout but nearly silent listener. During one of these, various philosophical doctrines were discussed, and among others the nature of the principle of life, and whether there was any probability of its ever being discovered and communicated. They talked of the experiments of Dr. Darwin, . . . who preserved a piece of

vermicelli in a glass case, till by some extraordinary means it began to move with voluntary motion. Not thus, after all, would life be given. Perhaps a corpse would be re-animated; galvanism had given token of such things: perhaps the component parts of a creature might be manufactured, brought together, and endued with vital warmth.” (22) (「バイロン卿とシェリーの間で多くの長い会話が交わされ、私は熱心に聞き入りほとんど何も言いませんでした。そのような会話においては様々な哲学的見解や生命原理の性質とそれが発見されたり伝達されたりする可能性についての議論がありました。彼らはダーウィン博士の実験について話していました。・・・彼はカラスケースの中にバーミセリというパスタのかけらを保存していると、何か驚くべき方法でそれが自発的な動きを始めたのです。しかし、そんな風に生命を付与することはできないだろうということに結局はなりました。でも、死体であれば再生させることができるかもしれない。ガルヴァニズムがそのような見本を示しているのではないかと。生命体の部分であれば、加工して寄せ集め、生命の温かみを与えることはできるかもしれない。)」奇妙なことに、このメアリ・シェリーの記憶の会話からポリドリの姿は消えている。しかし、メアリ・シェリーの記憶に残る生命原理に関する話題は、医者であったポリドリが最も得意な分野であったのではないか。ピショップはその点について、次のように述べている。“Experiments in galvanism were well known and Polidori would have been familiar from his time at medical college in Edinburgh with the work of its discoverer Luigi Galvani (1737-98) and the gruesome experiments on cadavers by Giovanni Aldini (1762-1834) which suggested life might be restored.” (xvi) (「ガルヴァニズムの実験はよく知られており、ポリドリはその発見者であるルイージ・ガルヴァニの研究と生命が再生の可能性を示唆するジョヴァンニ・アルディーニの死体を使った身の毛もよだつ実験について、エディンバラの医学生であったころから熟知していたであろう。)」『フランケンシュタイン』第3版は1831年に出版されており、メアリ・シェリーがその版への序文を書いた頃には、バイロン、シェリーを含めポリドリも他界しており、メアリ・シェリーの記憶も曖昧になっていたのかもしれない。1822年にシェリーが他界したのちメアリ・シェリーは著しく彼を理想化し、その姿は『最後のひとり』(*The Last Man* 1826)にか弱くも理想的な指導者エイドリアン (Adrian) として描かれている。続いて1824年にバイロンが亡くなった際にもメアリ・シェリーはひどく落ち込み、感傷的な書き込みをジャーナルに残している。“Beauty sat on his countenance and power beamed from his eye — his faults being for the most part weakness induced one readily to pardon them. Albe — the dear capricious fascinating Albe had left this desert world.” (*Journal* May 15th 1824) (「彼の面には美が鎮座しており瞳からは才能があふれ出ていた。—彼の欠点、それは多くの場合において弱さなのですが、人は容易にそれを許してしまうのです。エルビ [バイロンの愛称] — 親愛なる気まぐれで魅力的なエルビが、この荒涼たる世界を去ってしまった。)」ここに、人生で最も思い出深いであろう一時期を共に過ごしたバイロンへの深い愛情が見られるのではないか。すでに亡くなり思い出の中で美化された詩人たちと比べて、詩人の従医という立場であったポリドリ

は、メアリ・シェリーにとっては、怪奇譚創作の一夜の思い出の中で相対的に重要性の低い人物となったのかもしれない。もしくは、『ヴァンパイア』の出版の経緯と同じく、ポリドリではなくバイロンとシェリーの会話から『フランケンシュタイン』が誕生したとする方が、読者にとってより興味深い作品となると考えたのかもしれない。

- 2) ベレスフォードが引用している同じポリドリの手紙は、ピショップのものとはわずかに異なっているが、ポリドリが『ヴァンパイア』をバイロンではなく自分の書いたものだとしている点では一致している。

参 考 文 献

- Beresford, Matthew. *From Demons to Dracula*. London: Reaktion Books, 2008.
- Bishop, Franklin Charles. *The Vampyre and Other Writings*. John William Polidori. Manchester UK: Carcanet Press, 2005.
- . ‘Introduction.’ Bishop. vii-xx.
- Feldman, Paula R. and Diana Scott-Kilvert Eds. *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Baltimore and London; Johns Hopkins UP, 1987.
- The Gentleman’s Magazine, v. 89 pt. 1 1819 p. 633.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015027525057;view=1up;seq=669> (2018/02/19)
- ‘John William Polidori.’ Romantic Circles
<https://www.rc.umd.edu/editions/frankenstein/V1notes/polidori02/01/2018>
- Morrison, Robert and Chris Baldick. ‘Introduction’ *The Vampyre and Other Tales of the Macabre*. Polidori. vii-xxii.
- Polidori, John. *Ernestus Berchtold; or, The Modern Oedipus*. Bishop. 47-150.
- . *The Diary of Dr. John William Polidori*. Bishop. 163-234.
- . *The Vampyre and Other Tales of the Macabre*. Eds. Robert Morrison and Chris Baldick. Oxford: Oxford UP, 1997. 3-23.
- 笠原順路編『対訳 バイロン詩集—イギリス詩人選 (8)』岩波書店 2009年
 レ・ファニユ『吸血鬼カーミラ』平井呈一訳 創元推理文庫 1970年

* 本稿は2016年度松山大学特別研究助成の成果である。